「原爆紙芝居」に込めた思い

私は8歳のとき、広島で被爆しました。あの体験を語り継ぐために「紙芝居」という形を選びました。8歳の子どもだった私の記憶が、同じ年頃の子どもたちにもっとも響くと信じたからです。

現在制作している紙芝居は、キリスト集会の子どもたち向けですが、聖書の言葉を除けば、一般向けのものと内容はほぼ同じです。一般向け紙芝居の出版は、アメリカでの計画が一時中断し、現在別の出版社と交渉中です。

紙芝居を見た子どもたちは、「けんかをしないようにしたい」「原爆の作り方を知っているか?」「『ピカドン』という言葉が面白かった」「幸さんがカナダに来てよかった」と率直な感想をくれます。

高学年の生徒たちは、戦争の恐ろしさや心の痛み、核の人体への影響などを理解し、「平和の大切さを考え続けたい」と話します。

大学生や若者たちは、「ビジュアルがわかりやすく、歴史を学ぶ助けになる」「幸さんの体験を直接聞いたことに感謝している」と語ってくれました。

ある方からは、「悲しくも感動的な物語をありがとう。あなたの優しい人柄が全体にあふれ、心に深く響いた」という感想も頂きました。

今の世界では、核兵器よりもミサイルの脅威が大きく、地球規模で人類が滅びかねない危険と隣り合わせです。だからこそ、未来を生きる子どもたちが、平凡でも安心して暮らせる日々を送れるよう、希望と愛に満ちた世界の実現を願っています。

平和は口で唱えるだけでは訪れません。人類の歴史は争いの繰り返しでしたが、それでも私は、一人ひとりが平和のために「自分にできること」を考え、行動に移すことを心から願っています。

私にとっての平和は、祈りから始まります。キリスト者として、神と直接つながりながら歩いていく道の先にこそ、真の平安と希望があると信じています。

平和を求め続けるすべての人と心を重ねながら、私は今日も紙芝居を届けています。

[GOOGLE MULTI-LANGUAGE TRANSLATOR \(翻訳アプリ\)](#)